

ニューアプローチ中上級日本語のテキストにおける「人」と「者」の接尾辞の分析および日本語学
習に対する含蓄

デビ. アディンダ

Universitas Negeri Jakarta

debbyadinda@rocketmail.com

概要

A. はじめに

インドネシア語にはもちろん、日本語にもスフィックスまたは接尾辞がある。小泉 (1984: 105) によると、接尾辞と言うのは語幹の後に付加される接辞である。増岡と田窪 (1993:62) は語幹の後に付くものを「接尾辞」だと述べている。日本語の接尾辞は多いが、秋元 (2002:93) によると、接尾辞の一つは人物表示の接尾辞だと述べている。例えば、「家」・「者」・「手」・「人」・「士」などである。現在の日本語教育では人物を示す接尾辞に関する先行研究はそれほど多くない。そのため、人物を示す接尾辞に関する研究する必要があると思われる。Vance (1993: 118) は「者」の近い類義語は「人」だと述べている。したがって、「人」と「者」という接尾辞しか研究しない。

日本語で「人」と「者」という接尾辞はテキストの中でよく見つかる。日本語のテキストは多いが、「人」と「者」という接尾辞がよくあるテキストの一つはニューアプローチ中上級日本語である。そのため、ニューアプローチ中上級日本語というテキストは本研究の対象になることにした。

本研究のテーマは「ニューアプローチ中上級日本語というテキストにある人と者という接尾辞の分析」である。研究のねらいは二つある。ニューアプローチ中上級日本語というテキストにおける「人と者という接尾辞の類似点と相違点」と「人と者という接尾辞はどんな場合に置き換えられるかどうか」を明らかにする。

これらのねらいが達成できれば、学習者も人と者という接尾辞に関する知識を得たい。日本語の教師もこの研究結果を学習で利用すると期待している。

B. 研究方法

本研究でのステップはまず、ニューアプローチ中上級日本語のテキストにおける「人」と「者」という接尾辞を使う実例を収集する。さらに、ニューアプローチ中上級日本語というテキストにおける「人」と「者」という接尾辞の類似点と相違点を検討する。最後に、意味の成分分析と置換方法で、「人」と「者」という接尾辞が置き換えられるかどうかを分析する。

C. 研究結果と分析

本研究はニューアプローチ中上級日本語のテキストにおける人と者という接尾辞を研究した。形と意味を見れば、「人」と「者」という接尾辞の類似点がある。一方、「人」と「者」という接尾辞の使用には相違点がある。

Sudjianto & Dahidi (2009: 68) は「人」という漢字が「じん」と「にん」と読む。その漢字は「ひと」とも読む。「じん」と「にん」の読み方は音読みで、「ひと」の読み方は訓読みだと述べている。

1. 人「ひと」

「日本語大辞典」の中で、人「ひと」というのは知能があり、言葉を持ち、道具を作り使用する人間と特定の人を指す語という意味である。「大辞線」の中で、人「ひと」というのはその事をするのにふさわしい人材あるいは有能な人材と人柄あるいは性格だという意味である。

ニューアプローチ中上級日本語のテキストにおける人「ひと」という接尾辞を使う単語が 26 ある。それらは怒る人、考える人、思う人、使える人、求める人、吸う人、自慢している人、自信がない人、通る人、批判する人、納得する人、訪れた人、ある人、当てた人、できる人、成功する人、予想した、思った人、取る人、話している人、答える人、持つ人、来る人、始めた人、納める人、負担する人である。

意味の成分分析と置換方法で、者「もの」という接尾辞に置き換えられることができる人「ひと」という接尾辞を使う単語がある。その単語にある人「ひと」という接尾辞は者「もの」という接尾辞を置き換えられ、その人の状態を表す。「日本語大辞典」には、者「もの」というのはその状態にある人を表すと書いてある。しかし、「ある人」は例外である。「ある人」に人という接尾辞は者「もの」という接尾辞に置き換えられない。筆者は者「もの」という接尾辞の意味を考察したあとで、特定の人を示すのに用いられる者「もの」という接尾辞を見つからない。

2. 人「じん」

「日本語大辞典」には、人「じん」というのは人種接尾辞と出身の人という意味だと書いてある。「大辞線」には、人「じん」というのは国籍、地域、職業、分野などを示す語と複合して用いられるという意味である。庵 (2002: 531) は人「じん」という接

尾辞とは名詞の後に付いてのような意味を表す。それに、－出身の人、－界の人、－分野で働いている人、傾向などを表すと述べている。

ニューアプローチ中上級日本語というテキストにある人「じん」という接尾辞を使う単語が 8 ある。それらは日本人、イギリス人、社会人、外国人、現代人、猿人、原人、旧人などである。

意味の成分分析と置換方法で、すべての人「じん」という接尾辞を使う単語は者という接尾辞に置き換えられない。筆者が者「しゃ」という接尾辞の意味を考察したあとで、人種、出身の人、界の人を示すのに用いられる者「しゃ」という接尾辞が見つからない。

3. 「にん」の読み方

「日本語大辞典」には、人「にん」というのはひとを数えるのに用いられるという意味である。それに、「大辞線」には、人「にん」というのはその役目の人という意味である。

ニューアプローチ中上級日本語というテキストにある人「にん」という接尾辞を使う単語が 9 ある。それは二人、一、何人、百人、五人、二十人、一人、役人、二百人などである。

意味の成分分析と置換方法で、すべての人「にん」という接尾辞を使う単語は者「しゃ」という接尾辞に置き換えられない。筆者が者「しゃ」という接尾辞の意味を考察したあと、人を数えるのに用いられる者「しゃ」という接尾辞が見つからない。意

味の成分分析と置換方法で、日本語で役人も役者もある。しかし、役人と役者の意味が違い、互いに置き換えられない。

者という漢字は読み方が二つある。それは「もの」と「しゃ」である。「もの」の読み方は訓読みということで、「しゃ」の読み方は音読みということである。

1. 「もの」の読み方

「日本語大辞典」には、者「もの」というのはその状態にある人を表すと書いてある。それに、「大辞線」には、者「もの」とは軽視する場合に用いられると書いてある。

ニューアプローチ中上級日本語のテキストにおける者「もの」という接尾辞を使う単語が 5 つある。それは悪者、出した者、若者、嫌われ者、笑い者である。

意味の成分分析と置換方法で、状態を表す「者」という接尾辞は人「ひと」という接尾辞に置き換えられる。しかし、軽視するために用いられる「者」という接尾辞は人「ひと」という接尾辞に置き換えられない。

2. 「しゃ」の読み方

庵 (2002: 531) によると、者「しゃ」といのは「その動作をする人」と「それを持っている人」である。

ニューアプローチ中上級日本語のテキストにおける者「しゃ」という接尾辞を使う単語が 16 ある。研究者、ツアー参加者、筆者、消費者、利用者、兆戦者、解説者、視聴者、納税者、発表者、業者はその動作をする人を表す。技術者、高齢者、高所得者、低所得者、死傷者はそれを持っている人を表す。

意味の成分分析と置換方法で、すべての者「しゃ」という接尾辞を使う単語は人「ひと／じん／にん」という接尾辞に置き換えられない。筆者が人「ひと／じん／にん」という接尾辞の意味を考察した結果、「その動作をする人」と「それを持っている人」を示すのに用いられる人「ひと／じん／にん」という接尾辞が見つからない。

D. おわりに

本研究では次のような点が明らかになった。

1. ニューアプローチ中上級日本語というテキストにおける人と者という接尾辞の類似点と相違点は次のようである。
 - a. ニューアプローチ中上級日本語というテキストにおける人と者という接尾辞の類似点は形と意味にある。
 - b. ニューアプローチ中上級日本語というテキストにおける人と者という接尾辞の相違点は使用にある。
2. ニューアプローチ中上級日本語というテキストにおける人と者という接尾辞は置き換えられるかどうかは次のように説明する。
 - a. 人「ひと」という接尾辞を使う単語は者「もの」という接尾辞に大体置き換えられるが、置き換えられないこともある。
 - b. すべての人「じん」という接尾辞を使う単語は者「しゃ」という接尾辞に置き換えられない。

- c. すべての人「にん」という接尾辞を使う単語は者「しゃ」という接尾辞に置き換えられない。
- d. 者「もの」という接尾辞を使う単語は人「ひと」という接尾辞に置き換えられるが、置き換えられないこともある。
- e. すべての者「しゃ」という接尾辞を使う単語は人「ひと／じん／にん」という接尾辞で置き換えられない。